

体験版用、本文一部抜粋

Blackeyes 発行

エルエルフ×アードライ

時には足腰立たない程打ちのめされた事もある。

呼吸もままならない程の苦痛を何度も味わって来た。

結果、多少の苦痛に慣れてしまった身体が出来上がる――が、積み重ね
耐えられる痛みとは違う痛みが身体を襲う。

呼吸はどのようにしたのか……そんなことすら弾け飛ぶ程の傷みは、生
きたまま肉体を串刺しにされたようなもの。

それを紛らわせてくれたのはエルエルフとの会話であったのは確かだ
が――

「んっ、あっああ……」

腹部辺りにある圧迫する感じからスツとそれらが引く。

奥まで入ったものを抜いてくれる、これでこの卑猥な行為から解放され
る。

その思いは一瞬にして崩れ散った。

異物が体内に侵入していく不快感とは違う、例えるなら、銃に装着した
弾丸がトリガーを引いた事で飛び出して行く、それを体感しているよう。

ズンツと的に当たり、次の弾丸が装着され、またトリガーを引かれる。

「知っているだろう？ 射撃の腕には自信がある。アードライの性感帯
をピンポイントで貫いていると自負してもいいか？」

「はっ……ぐっ、うっ……」

エルエルフ×ハルト

「あの、ちょっと、痛いかも……」

「注文を付けるのか？ 生意気だな。じゃあ、こつちを弄ろうか」

手のひらで擦られる行為は確かに気持ちいい。

しかし擦られ続けられると、擦れて痛いのだ。

握られていた感触が消えると、次に弄られたのは――

「え？ そこつて。あの……」

「男に穴といえば、ここしかない。ここを解さないと挿入できないからな。

女経験があるのはわかったが、男経験はなさそうだ。指、何本までが入れ

ば、男のモノを受け入れられるか、知っているか？」

「え？ ええっと……三本くらい？」

「了解した。三本入るまで耐えるよ？」

三本と言ったのは確かにハルト自身。

言った本人は、指三本の太さを自分の指で確認をする。

「無理、無理だから……」

「無理かどうか、やってみなきゃわからないだろう？ それに、伸縮自在

な個所だ、強引に入れたって裂ける事はない。ちょっとは切れるだろうが」

「それってつまり？」

「どちらの無理を通すか、決めるのはおまえだ」

「え？ ええ……？ んっ、あっ……」

※それぞれ話の前後は本文の方でお楽しみ頂ければ幸いです。

体験版のダウンロードありがとうございます。